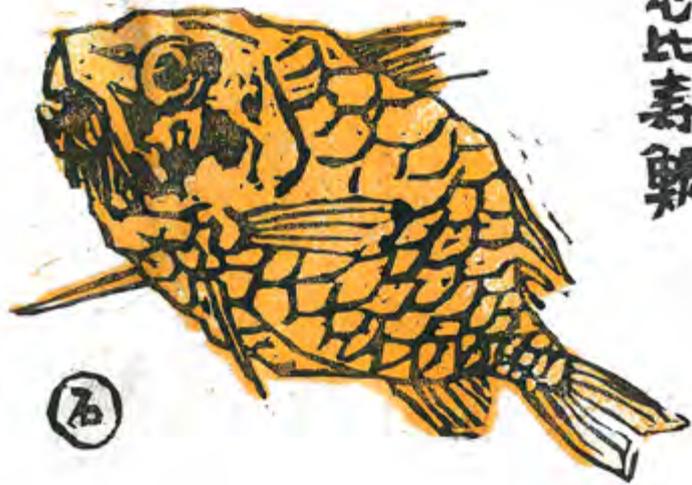


あを 10

2016



三内丸山遺跡



版画 武井石艸

虫の音がひとの話を割こうとする
蝉声をきくは人間のみならず
虫の音が否定することあり迷ひある
玲々と虫夜学子のたしかな影

堀内一郎

朝顔や経師大板拭くことより

佐藤喜孝

水音 昭和 32 年 9 月

あそ

十月



東京 佐藤 喜孝

文旦

遠地にて文旦ふたつみつめあふ
ネクタイのスメラノミコト雲の峰
天皇がヌーと出てきし夏の晝
白聖紀に人の靴跡けふも暮る
でんでんむしも蟻も動いてゐなくなり

埼玉 須賀 敏子

八月や

八月やむのたけじさん星になる
黙禱を済ませ旬会へ雲の峰
台風を避けて夫行く月の山
病む友や薄紅色の蓮の花
又しても指のさかむけ蠅叩



埼玉 竹内 弘子

金魚玉

金魚玉ひとを隔つは隔てらる
アガサ・クリステイの顔ぶれ金魚玉
剥き並べ蝦蛄むらさきの簾なす
噴水の高上るとき森消えし
柱のない家を貫く稲光

東京 田中 藤穂

墓の声

秋暑し天皇老いを語らるる
東御苑の中の茶畑夏の雲
やや遠い木に移りたり法師蟬
続々と昭和が逝くや墓の声
帽子みなゆるくて夏を老いにけり

石川 中川句寿夫

夕化粧

またの名を妻がしりゐて夕化粧
追つ付けにひよ来る板戸繕ひぬ
膝立し足の爪切る糸瓜かな
防災の日の踏み切りの向ふ側
茸番の今は昔の話かな

三重 長崎 桂子

露草

ジジジパタパタ蟬跪く道テ口悼む
今日も又頼る甘酒飲干して
炎熱に眩しい日差ペダル踏む
曙光や露草の露呼応する
露草の藍濃くすがし朝かな



東京

森 なほ子

旅靴

朝顔に転がしてゆく旅靴
久米島のスコールに濡れ波に濡れ
冷房の地下にメキシコ料理店
弁財天にラップ流れて路地晩夏
蛇口より水洩れてゐる原爆忌

東京

赤座 典子

酷暑

彩雲の帯を締めたる雲の峰
夏の海面離陸機鷗に追越され
三日月へ一本の道帰る道
靴緩く履きて男の子子夏休
幼子に言ひ負かされてゐる酷暑

埼玉

秋川 泉

夏のまん中

ひぐらしに急かされ野外映写会
蝉時雨読経がいつか合はせをり
地面からゆげ立ちのぼる酷暑かな
施餓鬼会や『アイスクリン』をふるまはれ
颱風の過ぎたる夜を五輪観る

東京

石森 理和

鈴虫

野菜室使ひ切りたし夏の旅
晴れ女雨女居る丸団扇
虫時雨茶筒の底の渋さかな
鈴虫や何処に雨を凌ぎをり
本降りには夏の台風達磨落し



山梨 井上 石動

雑詠

腹掛けの厚め搔きだす夜の秋
鬼の子へ風はララバイよう寝るばい
ぬる爛のまだあたたかしの良夜かな
双体の道神へ降り実むらさき
頭上注意ものは柄の実のボスン

埼玉 大日向幸江

残暑

身にまとふ帯を解きたる残暑かな
巖から岩ひたひたひたとはんざきの
夏鴉なんじゃもんじゃに巢をかけて
立秋の前髪さらり風に揺れ
無心なる子供の一打西瓜割り

千葉 黒澤 佳子

山手線

新米はひとめぼれなり嫁も子も
羽音する枕元なり蚊をピシヤリ
緑陰や影に色ありベンチにも
酷暑なり山手線のドアー開く
火床にと点火送り火大文字

東京 佐藤 恭子

雑詠

終戦日鯉はうしろを向けません
蓮の露啄む雀二羽三羽
蓮揺るる見物人の列乱れ
噴水に纏はりつきし秋茜
酷暑かな透きつ齒からは江戸訛



東京 七郎衛門吉保

みちのく旅

八甲田兵士の姿夏の檜葉
ラッセラーと夫婦めをと跳人と乳母車
小京都車夫玉の汗羽後訛
竿燈の繰る人を繰る囃子方
男郎花傍に植ゑてと女郎花

東京 篠田純子

羯諦羯諦

幽世の友と語りぬ蝉時雨
煽風機羯諦羯諦と首を振る
五番線より乗りあはせたり瑠璃揚羽
酷暑の鎖骨ボルタリングの突起めく
左から右に拭へり蝉時雨

石川 定梶じょう

安堵

深さうなところ紺色鵜はかづく
タグボートゆっくり急ぐ夕立して
渡御過ぎてふたゝび村の辻広し
海荒れの秘書の二日目古畳
打ち損じちよっぴり安堵蠅のため



こちよこちよと窓で手まねき秋小雨	佐藤喜孝
サングラスかけぬて手持ち無沙汰かな	定梶しよう
夏帽を選ぶその日をいとしめば	須賀敏子
いくたびも手が空をきる螢かな	竹内弘子
佃島葦簀の蔭に猫二匹	田中藤穂
仔犬の名ロンドとハリー冷房中	中川句寿夫
大風とそよ風起す洩団扇	長崎桂子
待たされし犬が空見る墓参り	森直子
朝一番ミンミンが啼く直ぐ雨に	森理和

青葦の鋭き涼の沼覆ふ	赤座典子
ひとときの子守のはずが夏の星	秋川泉
玉まつり天の磐舟にて来ませ	井上石動
テーブルの上を目指すや蟻の列	大日向幸江
紫陽花に鎌倉行こか独りでも	黒澤佳子
終のいろ残し花梨の花落下	佐藤恭子
御柱疵誇らし気立ち姿	七郎衛門吉保
岩角に水掻き貼りて鶺鴒の眠る	篠田純子

喜孝抄



ていま



夢殿は居留守のやうに暮の秋

佐藤 喜孝

修学旅行生や、観光客で何時も賑わう夢殿も、時に静かに。魅力的な展示品が、「今は、○○展に行っています」と居留守を使っているように静かです。夢違観音も在る法隆寺。「夢殿」の存在感と、発想のファンタジックな一句と鑑賞致しました。(純子)

出帆の水尾の重たく油照り

定梶じょう

船が岸を離れる時、スクリューが頑張りを見せます。エンジン音や、思わぬ方向への揺れ、燃料の匂いもこの句から感じられます。水尾はぶ厚く重そうにみえます。船尾から船出の水面を見ている作者がいます。(純子)

夏帽を選ぶその日をいとしめば

須賀 敏子

ファッションと、機能性を考えて作者は夏帽子を選んでいきます。待ちに待った嬉しいお出かけの日に、かぶる帽子です。「一期一会」を連想する句でした(純子)

くちづけに似て火口湖の霧まどぶ

竹内 弘子

火口湖からの、一定方向からではない風について、霧が作者に纏いついています。火口湖の下のマグマと、作者自身の情熱をも感じる、官能的な句です。(純子)

梅雨の蝶よるべき花のなくなりし

田中 藤穂

華やかだったご友人への追悼句なのでしょう

か。心細さを感じる一句です。梅雨の蝶の羽の重さと、作者の気持の重さがかさなります。(純子)

祖父のものかも危な絵を曝しけり

中川 句寿夫

年代物の危な絵は、浮世絵の多色刷りでしょうか。色が褪せていないか、紙魚はいないか、丹念に見ている作者が、段々と前のめりになっていきます。(純子)

大風とそよ風起す浚団扇

長崎 桂子

軽くて丈夫な浚うちわは激しく扇ぐと随分と風が出て、涼しくなります。落ち着いたところで軽く扇いで手が楽に。水にも強く丈夫な浚うちわは作者のお気に入りなのです。(純子)

待たされし犬が空見る墓参り

森 直子

家の近くにペット同伴可のオーブンカフェがあります。飼い主がコーヒーを飲みながら寛いでいると、傍らの犬も大人しくしていて良い光景です。掲句の犬は墓参り中の飼い主を待っています。空を見ている犬は哲学的です。(純子)

無人駅峰より昇る入道雲

森 理和

音の無い、映像のみの光景です。入道雲が湧くと言う表現では、間に合わないくらい、みるみる雲が昇っていきます。作者は入道雲のエネルギーに集中しています。(純子)

小鴉の甘え尽して日暮れどき

山莊 慶子

親カラスが攻撃してくるので、カラスの巣には近づいてはいけなさと教えられましたので、先ずこの句の状況に驚きました。小鴉に作者の幼少期を、親カラスに作者の子育ての頃を重ね

ていらっしやるのでしょうか。カラスの親子を
見ている作者の優しい眼差しがみえます。(純子)

夏の朝鏡の中に母を観る

秋川 泉

同じ経験があります。自分は父親似とばかり
思っていたのに、ある時突然母の顔が鏡に映って
います。驚きと懐かしさに呆然とします。(純子)

位置変へぬ宿題帳ぞ雲の峰

井上 石動

明日は宿題をしなければと思いつつ、朝には
すっかり忘れていた夏休み。宿題なんかやって
る暇はありません。雲の峰に子供のエネルギー
が現れています。(純子)

子雀にマリーと名付け埋葬す

大日向幸江

作者は子雀を拾い上げますが、こと切れてい
たようです。ホームランバーのスティックに、

文鳥の名を書き墓標とした、私の子供の頃を思
い出しました。(純子)

若冲展日傘日傘や又日傘

黒澤 佳子

私は、若冲展に二回挑戦して二回挫折しまし
た。三時間半待ちとか。作者は首尾良く観るこ
とができたようです。時間をかけて並んでも、
若冲の綿密な筆致を見られ、羨ましい限りです。
(純子)

離るがまま土におちつく夏落葉

佐藤 恭子

枯れ葉は乾燥していて軽い感じがするので
が、夏落葉には水分と重さを感じます。若い葉
に今後を托し散っていく夏落葉。土におちつく
の表現で、重さとともに無常感も感じました。

夏落葉軍靴が踏んで吐息の夜 TIN・AUNG・MOE

(純子)

能登突端隣国遠し白日傘

七郎衛門吉保

久我美子風の美女が日傘をさしながら「きっと
あの国がここから見える筈だわ。だって地図で
見ると直ぐ近くですもの」(能登の二文字で、『ゼ
ロの焦点』の映画のキャストイングになり、す
みません)。(純子)

サングラスかけぬて手持ち無沙汰かな

定梶 じょう

何を期待してのサングラスだらう。別にさし
たる目的、期待はないのだが、サングラスをか
けるのには、ちょっとした別の世界への心待ち
がある。「手持ち無沙汰」がささやかな変化へ
の感情をおもしろく伝へてくれる。(喜孝)

七夕や青き地球にテロリスト

須賀 敏子

「七夕」には天の河の織姫彦星の世界ととも

に星への願い事を短冊に託す風習が今も盛んに
行はれる。美しき青き地球にテロリストがゐる
ことに作者は無念と思ふ。「七夕や」と大きく
季語を据える。作者の思ひをただ一語の季語に
託す潔さ。(喜孝)

火星濃し誰を恋ふるにあらざるも

竹内 弘子

弘子さんは今病牀にあり句作が叶はない。今
月号は『題詠しりいず・火』(一九八八年六月
発行)から出句させていただいた。この『火』
の出句者八名のうちいま作句を続けてゐるのは
亀田虎童子・木村嘉男とわたくしの三人になっ
てしまった。掲句を含め。「いくたびも手が空
をきる螢かな」・「くちづけに似て火口湖の霧ま
とふ」などは『暖流』への発表句とすこし違ふ
趣がある。女性をもちにぶつけることは作者の
余りせぬ印象である。魅力満点な艶冶なる句で

比来披見

ある。題詠の参加者数しか本を作らなかつたので気を許して作りたい句を作られたのではないかと思ふ。因みにこの号から。

墓石に蟬ぶつかつて火を吐けり 高島 茂

鯛焼を裏返すたび火の秀見ゆ 亀田虎童子

火の好きな少年と逢ふ蟾 木村 嘉男

(喜孝)

佃島葦蕒の蔭に猫二匹

田中藤穂

力の抜いた句も愉しいもの。人気のない昼下がりの佃島が浮かび上がる。(喜孝)

仔犬の名ロンドとハリー冷房中

中川句寿夫

小型洋犬のやうだ。皮肉つぼく犬のために冷房中なのだと書かれてゐる。いや、句寿夫さんは素直に可愛い小犬だと詠まれたのかも少しぬ。皮肉に聞こえたのは読み手が捻くれてゐ

ホトトギス 八月号

稿債のはかどることも夜の秋 稲畑 汀子

昨夜信濃今宵摂津の夜の秋 稲畑廣太郎

沖 八月号

上総みな青嶺といへど高からず 能村 研三

雨月 八月号

老鶯の声称ふれば又鳴きぬ 大橋 暁

槐 八月号

影生まれ箱庭の景定まれ 高橋 将夫

馬酔木 八月号

作り淹なれど心にしぶき浴ぶ 徳田千鶴子

風土 八月号

青蘆をゆさぶり来る投網打 南 うみを

京鹿子 八月号

青梅雨のはぐれ鴉の胡乱なる 鈴鹿 呂仁

六花 八月号

すいれんに包まれぬたる一つ岩 山田 六甲

鳴 八月号

唾蟬の方尺闇がにじり寄る 井上 信子



るのだらう。他に「羽抜軍鶏びた一文も出さぬなり」の諧にも魅かれた。(喜孝)

青葦の鋭き涼の沼覆ふ

山莊慶子

涼しさを描くにはやはり単子葉植物であらう。特に水辺は涼を呼ぶ。青葦の葉を「鋭き涼」と表現した。一段と涼を呼ぶ表現を得られた。

(喜孝)

岩角に水掻き貼りて鶉の眠る

篠田純子

鶉にとつて余程に気持ちのよい日和であつたやうだ。その鶉の蹠を鋭く観察してゐる。薄い膜の有り様が目に見える。「貼りて」が目目。然もありなんと首肯した。(喜孝)

寄せものに沈めて赤きさくらんぼ 高橋 道子

万象 八月号

だいだいの転がる路地やまた一つ 大坪 景章

春燈 八月号

夏山となりてや寛に桜島 安立 公彦

末黒野 八月号

雲を洩る日差しを返し夏つばめ 小川 玉泉

葉桜や芭蕉句碑より道岐れ 松本三千夫

雲の峰 八月号

子ら沸けるごと廃校のカンナ咲く 朝妻 力

萱 八月号

胡瓜咲き姉弟論語を読み下す 木村 嘉男

まくなぎの高さが顔の真正面 亀田虎童子

蓴池ひとめぐりする時間かな 小島 良子

朝 八月号

はるかなるものを指しては踊るなり 岡本 眸

こだま 六月号

黄花コスモス今日の散歩の一里塚 松林 尚志

(喜孝)

俳境流連

蹲に金魚椿の浮かびおり
地廻りの猫避けるそこ落椿

吉保

七郎衛門吉保清瀬に居を構えたのは四十五年ほど前になります。転居後程なくて長女も誕生し「狭いながらも楽しい我が家」を地で行くような生活を始めることが出来ました。

家の四方を雑木林に囲まれ、鳥の囀りで朝は目を覚ますような、今考えると、いたく贅沢な住居環境の日常となりました。そんな環境に刺激を受け、庭作りにもいそしむようになりました。当初は、近所に住む伯父の趣味であった、木薔薇作りに刺激を受け、同じように始めてみましたが、なかなか難しいものでした。そこで同じ薔薇でも

育成が楽な、蔓薔薇に方向転換。これが大成功で、

近所でも評判になるほどのものとなりました。しかし、5m近い高さの専用のフェンスに伸びる蔓薔薇の、消毒と剪定などのメンテナンスには相当な労力と時間が必要で、それが叶わなくなった時点から、我が家の庭の主役は椿に交代したのです。

なぜ椿なの？に明確な答えはないのですが、カミリアなる英語の語感が、気に入ったのかもありません。地元の農園巡りで見つけた金魚椿が、我が家の椿第一号です。

12〜13cmになる葉っぱの先が、絞り込んでか三つに分かれ、和金の尾のように見えることが名前の由来で、正にそのとおりです。我が家に来て三十有余年、樹高5mほど、根本胴回り55cmの大木となり、花径が10cmを超える真紅な花を山ほど咲かせ、毎年楽しませてくれます。私には欠かせぬ歳時記となりそうです。

九鬼山のふはと押しだしおぼろ月 石動

平成十四年初夏「大月市広報」に『市民俳句教室生徒募集』と。俳句・短歌に何となく興味有りので応募。生徒20名余。9月開講。四カ月で計9回のその開始日。少々遅れて到着。席につくかつかぬかで、先生から「自己紹介と何故受講かを述べよ」。あせった私は、他生徒がどういう風に言ったかも解らぬまま『日本語の美しさを学びたいので参加した』と。(今思うと冷汗百斗)。

初対面の先生の名は、奈良土舟 70歳代。この土舟先生との出会いが我が三つの「幸多き俳縁」の初。句・書・画・情すべて揃ったお人。毎回先生に事前出句しての土舟選には、短冊又は俳画入りの色紙、かつ、どこが良かったか、また、こうすべき……の意見。実地見学・吟行なども交ぜての、実に捻り多き四カ月。この市民俳句教室がそのまま「実生句会」として創立され、現在に至っ

ている。

市民教室が終了する頃、先生が私に言った。

『井上さんは、どこか結社を自分で探して、勉強を続けよ』。ご自分は山梨の結社の大同人であるのに、そこへ私を引きずり込むことはしなかった。自分で探せ……と言われたので、テレビだけで知る「その矜持・その俳句感・ざつくばらん性」で、藤田湘子を選び、「鷹」に電話を入れ入会。これが「幸多き俳縁」の第二。(飯田龍太在りせば、多分「雲母」を選んだであろうが、龍太は既に引退し、雲母も消失していた。)

さて、実生句会では、先生の一言一句を聞き漏らすまいと必死。実に素晴らしいことを話し、伝え、教えてくれた。疑問に思う時は、堂々と反論異論を私信で伝え、お返事を戴いた。先生との遣り取りは、先生がお亡くなりになるまでに、優に百通を超えた。

掲句は 実生句会一年目の作で、先生の俳画入

り特選色紙を戴いた。

その遣り方が、いいか悪いかは判らないが、この句をひっさげて東京新橋で月一回開催の「鷹中央例会」に初めて参加。約二百名超の参加者句群の中、『初心者句だろろうとして選んだ』の注入りで湘子撰となる。「九鬼山」という異な名前の醸す何かを基として鑑賞してくださり『ふわ：が、いいやねえ』。将に昇天の心地。帰宅後、例会出句を知らなかった土舟先生に報告。二人で心の中で「乾杯」。

(なお、この「中央例会」には、その後、数度出席も、酷評ばかり。曰く「意気がつちゃあいけねえよ」。曰く「てめえだけが解っている不親切句」etc.)
初心頃の自句ゆえ、上手い下手抜きで愛着の一句。

さて三つの「幸多き俳縁」の三番目は何かって？もちろん「あを」に混ぜてもらった事ですよ。

歩道から浅瀬に入るやうに冬

喜孝

むかしは駅まで何人抜くかと楽しみに歩いた。階段も山登りの足しにと一段とばしで上った。ウオークマンがあればどこまでも歩ける気がした。いつの間にやら歩くのが遅くなり階段の上り下りも手摺がないと不便に感ずるやうになった。振り返ると子供の頃よく転んで瘡蓋を作つてゐた。本来足弱な上に、居職。遅ればせながら気がつくのが遅かったやうだ。木枯さんの『鏡騒』には「老」の句が十七句、その中の

寒靄や老は泳いでゐることし

を読むと今ならよく分かる気がする。木枯さんはしばしばいままでの俳人が経験したことのない老を経験するのだから、老いの句を作らなければ勿体ないと自らも実践されてゐたのを懐かしく思ひ出してゐる。

あをキーワード俳句辞典(こはーこふ)

ご破算

算盤の合計ご破算青木の実

東 亜 未

鞋

片膝を立てて足袋履く鞋かけ

石森 理和

片足を右足にのせ足袋鞋

佐藤 恭子

小鱸

新涼の大根河岸や小鱸鮓

篠田 純子

湖畔

朝靄の柳浪湖畔に西施現る

東 亜 未

愛うたがはぬ眸「湖畔」の団扇

長崎 桂子

深爪や晩夏の湖畔にて痛む

定梶じょう

湖畔この凶柄涼しき皿時計

定梶じょう

暮れ残る山影黒き湖畔かな

王 岩

御飯

炊き立てのご飯味噌汁下萌ゆる

石森 理和

一膳の炊き立てご飯春の雨

石森 理和

終戦日同じ時間の朝ご飯

佐藤 恭子

花冷や御飯へ落とす生玉子

田中 藤穂

碁盤

柿落葉碁盤の上に白と黒

芝 尚子

碁盤目の彫られし岩に冬日さす

東 亜 未

語尾

語尾長しギヤルの主張とソーダ水

後藤 志づ

青桐やナムアマダブと蟬の語尾

田中 藤穂

さみだれやとなりに語尾の上る人

竹内 弘子

如月や語尾のやさしき人と居る

田中 藤穂

コピー

一閃にコピー機作動する薄暑

竹内 弘子

古文書のコピーかぐるし閨日過ぐ

竹内 弘子

小筆

できたてのコピーがにほふ夏期講座

竹内 弘子

十三夜小筆が含む墨淡し

関口 ゆき

身に入むや面相小筆ままならぬ

藤野 寿子

硯洗ふ面相小筆ねむごろに

藤野 寿子

五風十雨

耕すや五風十雨の空模様

王 岩

呉服

冬日射る一代で閉づ呉服店

石森 理和

五分

五分咲きの古き白梅香の高し

長崎 桂子

五分桜越後の白き山を背に

赤座 典子

花は五分ゆるゆると行く乳母車

田中 藤穂

五分粥を咀嚼してをり半夏生

斉藤 裕子

五分咲きの古き白梅香の高し

長崎 桂子



「浮かぶ」を外したい。「次々と雨の中なり五山の火」。
子らの吐く西瓜の種に蟻の列
上五「子らの吐く」が効いているでしょうか。大人なら吐かないが子供たちは、ということなんでしょうか。「蟻の列西瓜の種が落ちていて」。

山荘 慶子

秋川 泉

リオ五輪颱風の夜に終りけり
夜明け前まだ真つ白き酔芙蓉
雨の中次々浮かぶ五山の火
子らの吐く西瓜の種に蟻の列
朝顔の雨粒光り雨上る

夜明け前まだ真つ白き酔芙蓉

明けがた白くて、のち色が変わってくるから「芙蓉」の上に「酔」の字を被せるわけで、「酔」の字をとつてしまつた方が。「夜明け前まだ真つ白き芙蓉かな」。

雨の中次々浮かぶ五山の火

鉢植えのトマト熟せり声弾む
朝毎にブロック塀の蟬の殻
静寂やハイビスカスの咲く館
向日葵の堪えて健やか豪雨去る
日の暮れて儂く褪せし秋夕焼
鉢植えのトマト熟せり声弾む
「熟せり」と切ってしまったため「声弾む」の措辞が浮き上がった。「鉢植えのトマトや熟し声弾む」。
朝毎にブロック塀の蟬の殻
少し飛躍させて、「朝毎やブロック塀に蟬の殻」。

26

日の暮れて儂く褪せし秋夕焼

「日の暮れて」が無・用と思います。「秋夕焼儂く褪せてきたりけり」。

森なほ子

つくつくし螺子の緩んできしものも
いっせいに蓮の葉めくれ盆の風
見ゆるものみな季語京の夏座敷
角氷抹茶の泡に透けてをり
緑蔭や緑の奥になほみどり
つくつくし螺子の緩んできしものも

蝉の声をレコード盤に喩えたり、「岩にしみ入る」と聞きなしたり。なほ子さんは螺子、それも緩んできている、と聞きなした。面白い。

見ゆるものみな季語京の夏座敷

「京の夏座敷」だからこそ「季語」の如し、と捉えることができた。欲をいえば、「季語」と「京の」のあいだを離したい。「見ゆるもの季語なる京の夏

座敷」。

緑蔭や緑の奥になほみどり

「緑」をどれか一字削りたい。「緑蔭に入るその奥になほみどり」。

須賀 敏子

木道に丈の小さき吾木香
苦瓜の虚空をさぐるあしたかな
図書館の「謹呈」句集秋に入る
空蝉がゆずりあつてる椿の葉
頭からかぶればそれでアッパッパ
苦瓜の虚空をさぐるあしたかな

意味は充分判りますが俳句としてことばが不足。「苦瓜の虚空をさぐる蔓の先」。坐五「あしたかな」を外したくないのですが。

図書館の「謹呈」句集秋に入る

「謹呈」の印を押した句集。どこの図書館でも目につきます。友人が言ったことがあります。「いい

27

句がないんだよなア。立秋なのです。

頭からかぶればそれでアッパッパ

「かぶればそれで」がややぞんざい。「頭からかぶってそれがアッパッパ」。

黒澤 佳子

瓜漬けの歯応え確か茶漬かな
昼寝の子二歳違いの姉の手で・
朝顔のいくつ咲いたか指差す子

瓜漬けの歯応え確か茶漬かな

おいしそうです、音が聞こえてきそう。それもこれも中七で休止を入れ「茶漬かな」と切ったから。

昼寝の子二歳違いの姉の手で

上句の「子」を省略する工夫を。「二歳違いの姉」で、昼寝する子、とわかります。「昼寝せり二歳違いの姉の手で」。

朝顔のいくつ咲いたか指差す子

この句の「子」も、あってもいいがない方が。「朝顔のいくつ咲いたか指を差し」。

長崎 桂子

外出の気概は失せし黒揚羽
白い花夏の野菜の実り待つ
宵の風背筋ひやりの葉月かな

外出の気概は失せし黒揚羽

和語を遣え、ということではありませんが、「外出」も「気概」も固い漢語。ちよびり弱めたい。「外出する気概失せたり黒揚羽」。外出せんとして黒揚羽に出会ってしまった。たちまち暑気を感じて、さて。

白い花夏の野菜の実り待つ

咲いている白い花は、何だか知らぬが夏の野菜のものである。その実りを待とう、と。

地藏盆夫ゐて子のゐた日懐かし

座五「日懐かし」が窮屈。「懐かしむ夫と子のゐ

た地藏盆」。

宵の風背筋ひやりの葉月かな

やはり「背筋ひやりの葉月」がすわっていません。「宵の風背筋がひやり葉月かな」。陽曆九月の日暮れの風。ある時はまさにこんな感じ。

大日向幸江

三伏や刻こく変る空模様
雨ごとに紫極め桔梗かな
黄昏に音なく崩れ蓮の花
夜具干して名残をしみし避暑地かな

三伏や刻こく変る空模様

「刻こく変る」が凡。「三伏や刻一刻と空模様」。黄昏に音なく崩れ蓮の花

「黄昏に」の「に」の措辞を嫌う先生方が結構多いのです。絶対ということではないのですが、外せるものなら遣わない方がいい。「蓮の花音なく崩れ黄昏るる」。

夜具干して名残をしみし避暑地かな

「名残ををしむ」が常套のことば。それに、「避暑名残」のことばも歳時記にあります。「避暑名残りけり夜具が干してある」。

田中 藤穂

朝顔やまた刻み出す古時計
江戸情緒残すこの坂穴子鮎
旧盆の東京の空青々と
どぜう屋の座敷混みをり籐蓆

朝顔やまた刻み出す古時計

早朝、花がひらいている。その花を見た瞬間、年来の時計の、秒を刻む音が聞こえ出した。あたかも一転機のように。

江戸情緒残すこの坂穴子鮎

「遺す」を遣うのなら「残る」の方がいい。「江戸情緒残るこの坂穴子鮎」。

旧盆の東京の空青々と

切れ、休止がないため減りはりがありません。「東京の空の青々旧の盆」。

どぜう屋の座敷混みをり籐簾

「籐簾」を敷きまわしてあるわけですから、「座敷」の語は不要。「どぜう屋の混んでをりたる籐簾」。

赤座 典子

帰るさに請ひし鬼灯三つかな
鬼灯をなだめて鳴らす暮つ方
夕まぐれ熱きままなる秋日傘
新涼や夕餉の香り漂へる
帰るさに請ひし鬼灯三つかな

「請ひて」とした方が軽い休止が生まれます。

鬼灯をなだめて鳴らす暮つ方

中七「なだめて鳴らす」が作者の実感なんでしょうね。吹いて鳴らすものは楽器であれなんであれ、

やみくもに吹いても宜しくないわけで、まさに「なだめて」吹かなくては鳴らないのです。古語「暮つ方」を据えたのは作者の好みなのでしょう。

夕まぐれ熱きままなる秋日傘

いい処に気付いたわけですが、「熱きまま」の語が不適當。「夕まぐれ秋の日傘のほてりかな」。「ゆうまぐれ」が効いています。

七郎衛門吉保

リオ五輪熱気のアとの法師蟬
メダル沸く地球の裏側敗戦忌
白と黒押し合ひ庄し合ひ雲の峰
蝦夷地にも酷暑道連れ新鉄路
メダル沸く地球の裏側敗戦忌

「メダル沸く」は省略のし過ぎ。あるいは「裏側」も字余りになります。「メダルに沸く地球の向かう敗戦忌」。

蝦夷地にも酷暑道連れ新鉄路

れもまた結構。

秋の風減りゆくものに消臭剤

秋風だから消臭剤が減ってゆくわけではない。でもこういうされると、春夏冬のどんな風よりも秋風が消臭剤をへらしてゆきそう。納得。

佐藤 喜孝

カマキリの卵チンした後のやう
蝉しぐれまっすぐに立つ避雷針
秋の風竈甲飴のすぐ乾く

カマキリの卵チンした後のやう

面白いですねエ。あの一見麩のような、しかし手ごたえのある卵。思いがけない喻えようですが、なるほどと頷いてしまうのです。

蝉しぐれまっすぐに立つ避雷針

蝉しぐれと避雷針。耳を圧する声の中の避雷針は、まっすぐ立たざるを得ないので。負けるな避雷針。

こういう場合の「にも」の「も」は、遣わなくともいいものなら外したい。「道連れ」の措辞も、いわば比喩的な言いかたのわけですから、素直に「蝦夷地なり酷暑を連れて新鉄路」。

中川句寿夫

半ズボン男だまっで通りけり
何もせぬ男もをりてお井戸替へ
蒲の絮飛んで何にもない処
相応に呆気おて胡麻を叩きをり
秋の風減りゆくものに消臭剤

半ズボン男だまっで通りけり

正装の男子が無言で通り過ぎる。これなら頷ける情景ですが作者は「半ズボンの男」だったという。アンバランスの面白さ。

蒲の絮飛んで何にもない処

〈蒲の穂のほほけつくして未だ飛ばず〉五十嵐播水
私のところでは、八月末には掲句のような具合ですが、その後風によつて飛び立ちます。それが「何にもない処」に落着いた。穂絮には気の毒だが、そ

秋の風竈甲飾のすく乾く

これも句寿夫さん句と同じ。やっぱり「秋の風」でなくてはならんわけです。



あをやぎ句会

九月十七日 京橋プラザ区民館

朝顔の越境するは許されよ 敏子
 秋暑し地下鉄銀座一丁目
 砂こぼれ夏のをはりの貝図鑑 なほ子
 水色のロツカールーム今朝の秋
 噴水のつひにとどきぬ茜雲 綾子
 しづかなる言葉よきかな草の花
 秋扇机の上に半開き 恵子
 捜し物見付けられずに秋灯
 十六夜の裏地をかき酔気かな 大佳
 秋涼しビジネスライクに微笑ふ巫女
 天おほふ帰燕の今し海上へ 藤穂
 葛咲いてみどりに濁る堀の水
 種採りて朝の楽しみひとつ消ゆ 慶子

秋萩句会

九月二十七日 安達宅

少年の權滑らせて秋隣 京子
 鱗雲後ろ歩きで犬見つめ 京子
 露天風呂絵柄女性の団扇浮く 純子
 長き間を羽ね繕へり水の秋 純子
 右に椀左にマイク音頭取り 喜孝
 秋夕焼遠くの国からきたやうな 喜孝
 われより先にはらわたのあり秋の風
 空蟬のふんばる梢風過ぐる 和子
 もうすぐと咲くのを待つよ萩の花 加代子
 メールにてよびあふ集ひ秋の風 房代
 真白な腕が見える乱れ萩 喜孝

毎月25日発売 定価1200円(税込) 月刊**俳句界** 2016年11月号

俳人の編集後記

〈特集〉
 ○高柳重信：澤好摩
 ○星野麥丘人：鈴木しげを
 ○高濱虚子：稲畑廣太郎
 ○安住敦：鈴木直充
 ○山口誓子：鳥井保和
 ○林翔：上谷昌憲
 ○森澄雄：小田切耀雄

あなたは句碑を作りますか？
 ○石工インタビュー
 ○芭蕉句碑は作り過ぎ？
 ○山口青邨と句碑、有馬朗人
 ○横山白虹、房子、谷子句碑、寺井谷子
 ○阿波野青歌と句碑、佐久間慧子

特別作品50句 大峯あきら
 21句 池田澄子 西村和子 山下知津子
 ＊セレクトシヨウ結社「風土」南うみを
 対談 佐高信の甘口で「コンニチハ！」
 川本三郎（評論家）
 日下野由季「海」

別冊 投稿俳句界 一流選者29名！
 日本一充実の換句冊

株式会社 文學の森
 お求めは・・・〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
 TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

あとがき

九月傳句会は豪雨のため急遽休会にさせて頂いた。午後には納まると云ふ予報ではあったが、そのやうに決断した。近年は地球温暖化が原因で天変地異が著しい。こう書いてゐる十月のいまも半袖一枚で過ごしてゐる。夏負けであらうか、秋口に入ったら夫婦共々疲れが出てしまった。わたしはビールと云ふ力強い味方が居るが妻はこのほか疲れが出て、きのふも整体に出かけた。皆様もご自愛あれ。

新

会員のご紹介

安達 房代 中野区東中野三丁目
江口加代子 西東京市芝久保町
佐賀 和子 武蔵野市西久保一丁目

俳

号改称

森 直子 ↓ 森 なほ子
森 理和 ↓ 石森 理和

〈喜孝〉

二〇一六年十月号

発行日	九月七日
発行所	東京都中野区中央2-50-3
電話	090-9828-4244
ファックス	03-3371-4623
印刷・製本・レイアウト	竹僊房 カット/松村美智子・ティリ エイマ 表紙・佐藤喜孝
郵便振替	00130655526 (あを発行所) 会費 一〇〇〇円 (送料共) / 一年 乱丁・落丁お取替えます。